

こそ歸著する所、自然の風化實に大なり。

如何に國家が國民美性の養成に盡し、大家諸氏の熱心なる斯道奨励あるも、國民に美風あるなくんば、養成不可なり、奨励無駄たらざるを得ず、併して一般人の美性涵養は手近なる同好諸君の善く人を導くの致す所にして、諸君の任も茲に到りて甚だ重大なる哉。

自重せよ、自重せよ、余輩の所説は諸氏を瞞著するにあらず、斯かる見解が最も適恰する剴切なる眞理ならん、併じて展覽會は實に諸君の手によりて衆民を美化せんとす、衆を督促するよりも、親切を以て彼等をして自ら發作せしめよ、而して余輩は以上の言よりして茲に一の好適例を擧げて、此稿を終らんとす。

從來横濱の地たるや紅塵、衆人甚だ惡俗なり、従ひて此地に起りたる畫會にして其全きを得たるものなく、展覽會も作品の御自慢や、入場料の多少を案ずるの類なりしが、大下先生の一朝保土ヶ谷に支部を開かるゝや、先生の教示は會員諸氏が熱心と共に遂に今秋十月中旬水彩畫第一回展覽會を開くに到り、小島、山崎兩先生、愛藏の諸大家參考品十七點は當會の光榮を大ならしめ、東京研究生諸氏作品は會員出品に一段の盛を致し、港北高臺、精華あらしめたり、其會員諸氏の親切なる會期二日間不幸陰雨の爲め來會者の足を止めたりとも猶千五百人を算して餘りあるもの、寔に偶然にあらざるなり、市人を益したるや、恰も芳醇の人を酔はしむるが如く、百花の人を薰ずるが如し、其

効果や深くして且つ遠かりしを信ずるなり。

余輩は如斯純潔なる展覽會の開かれんことを望みてやまず (完)

東尋坊〔上〕

石川縣小松町 湯淺竹次郎

今夏越前三國に、大下先生の講習會が開設せらるべかりしを、惡雨師の爲め、遂に、残念おぢやんとしたたが、實際其地近傍は、絶好の寫生地にて、爰に、聊か記せんとする東尋坊も、曲浦五六里の三國港近岸の景色中、特筆すべき、絶景の一つである。

一寸比較するに、加賀海岸は越前の國境より一里内外を除けば、實に情け無い程變化に乏しく、只觀る、一直線の砂礫長汀のみで、北走し能登半島となれり、能登國沿岸は、再び、風光秀美だと云ふ。

私は今年七月廿三日、親友四名と組織せる千秋會員の一人として、東尋坊探勝紀行に、小松發、上り六時三分の一番列車に乗つた、粟津、大聖寺と過ぎ、六驛目の金津停車場に下車し、右左より腕車夫の呼び聲を後に聞き流し、荻原温泉へと進む。

金津驛は町内細長く屈曲甚敷、一般に家建ち銷色を帯び、一寸「古驛」と題する繪になりさうだ、町を離れ、程無く荻原温泉場、遠望し得らる距離一里弱！、一望平田にて、道程は右を雜木山なる、其腰を添ふて行けばよい、途中、温泉戻りの浴客の人力車五六臺に出會ふ、八時半、温泉館室吉と云ふに入る。

一休の後、宿へ辨當の用意と案内者兼荷持ち人夫の周旋とを依

頼し、一同入浴す、此家の浴室、敢て數奇を凝せしと云ふには
あざざれど、近く改築して未だ成就せず、去あれ、夏なれば、
四方をつ開きの風もそよ／＼、加之、湯の溫度亦恰適いと心地
よし、浴後茶菓子に雜談笑話する裡、發足の準備整ひしを、下
女告げ來るに、皆々、身輕に仕度館を出づ、此處一等溫泉館紅
屋の前にて、盛裝の舞子妓に會ふ、一統恍惚たり、歩する事半
里斗り、日は出て居るが小雨となる、蕎麥の花に松林雜りの徑
を行くなり、折柄唄ふ者吟ずる者あるに、足の運びも忘れつゝ、
何時しか崎浦へと着けり、雨天なればにや、海模糊として煙り、
海面油の如し、風情面白き老松の間に、漁村の點綴隱現する態、
繪ならめやは、崎浦より浦續きに梶浦へと廻る、時正に午時、
空腹を感じる事甚敷、此わたり、一人ならんには寫生せんと思
ふ好景少からず。一小屋あり、濱女漁男の多く出入するに、赴
き見れば、今日は福井より雲丹買ひの來り、其算用拂ひをしつ
ゝあるなりき、此處より漁舟を艤し、安東浦迄の海路を取り、
奇勝を賞てつゝ晝食せんと議一決し、賃銀を掛引せしに半時余
をも要しぬ、今や一行乗舟せんと欲せしに、荷持の老人のみは
諾せず、浦づたいに、到着地迄は徒歩すべしとて別れたり。
乗船の其頃より、空一齊に霽れ渡り頓に暑し、海水恐敷迄に清
く、數尋の奥底迄、一塵の汚物無く、其深甚、其神秘的に朧明
なる、手足戰慄す、藁は舟夫が遺る櫓のまに／＼、紺青、藍碧、
褐赫色と搖亂す、甲君は朝日ビールとサイダーを舟縁に吊るし
て冷し、行厨を開き、且つ飲み、且つ喰ふ、折角の馳走たる大

章魚の甘煮、鯛の付焼よりも、福神漬を喜び競り食をせり。

松江展覽會報告

去る十一月三日四日の兩日當地有志者武部、福島、奥村三氏發
企となり城山公園元 東宮殿下御座所たりし興雲閣に於て第二
回洋畫展覽會を開催せり、山陰の地に於て未曾有の舉なりしを
以て兩日共非常の觀覽者ありたり、時恰も天長節祝賀會同處階
上に開かれたるを以て官民の紳士數百名の見物あり、洋畫趣味
普及上頗る好結果を得たりと信ず、出品總數百余點少許の油繪
パステルを除くの外水彩にして松江の外東京、安來、平田、濱
田、米子よりも集まり、會友竹下一郎氏も出品せられたり。

(奥村)

白馬會展覽會の水彩畫を觀て

大阪 夏月生

十一月一日より十日間、第二回白馬會洋畫展覽會は、當地三
越吳服店内に開かれた。

陳列された作品は誠に調子良き傑作揃ひにて、——中には多少
怪しいものもあつたが、——僕の胸を大いに躍らせた。多くは
色彩は、豊富で、活氣に富んで居た、惜むらく、水彩畫に三宅
氏作品が一點も無かつた爲に、少し寂寞の感がなきにしも非ず
であつた。然し、湯淺氏の作數點が、この憂を解くに充分であ
つた様に思ふ。一此内で、僕が良い出来であると思つた數點を、
指摘して見やう。——但油繪を除く。——